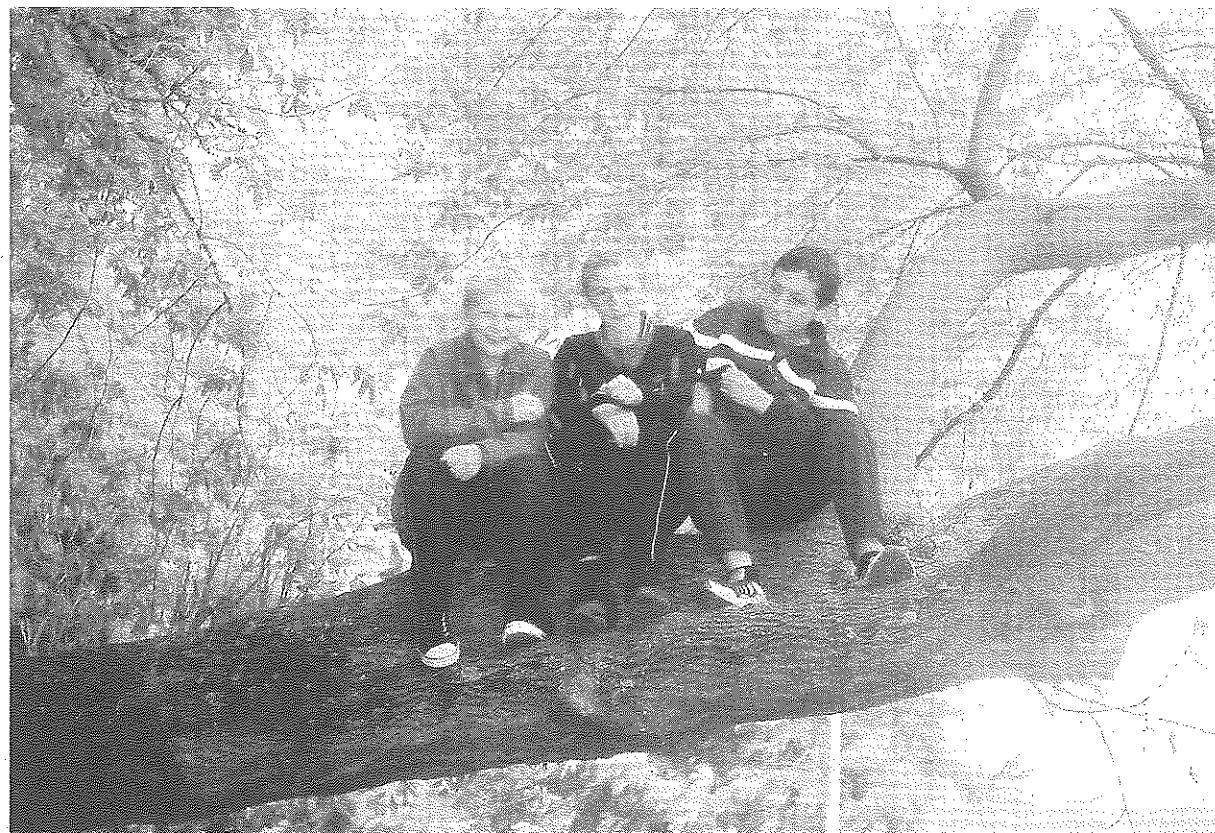


チェルノブイリ通信



発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局
連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株) ウィンドファーム内
TEL・FAX 093-203-5282
E-mail jimu@cher9.to
URL <http://www.cher9.to/>
郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



大樹に抱かれ、風に吹かれる子どもたち。
豊かな自然の営みは、やがて子どもたちの心の原風景となっていく。

チェルノブイリ調査隊報告

*ベラルーシ旅日記

チェルノブイリ調査隊行程記録

*写真で辿るベラルーシの旅

チェルノブイリ調査隊 小山 浩一

*はじめて訪れたチェルノブイリ支援の現場

チェルノブイリ調査隊 西首 延子

*雪だるま2号関連報告
道遠く、未だ、走れず

*チェルノブイリと関わる人々
ベラルーシの子どもたちと
向き合う佐々木さんの挑戦

*チェルノブイリ支援運動・九州
事務所での実習体験報告

*ノーモア・チェルノブイリ
手嶋雅弘チェルノブイリ写真展を訪ねて

ベラルーシでの旅日記

チェルノブイリ調査隊の行程記録

吉本美貴（チェルノブイリ支援運動・九州事務局）



調査隊の西首（左）さんと小山さん（右）

8月18日（水）

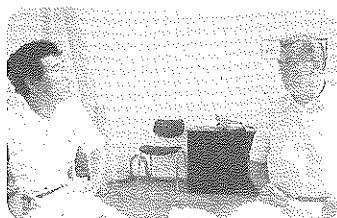
成田に前泊

今、福岡空港に向かっている。こうして電車の乗客を見ていると、やはり日本人ばかりだ。普段、自分が日本人だと意識することはないが、ベラルーシでは日本人がかなり珍しいらしい。こんなにたくさんの日本人を見られるのもあとわずかと思うと、いつまはただの他人なのに、妙に親近感がわき、日本を出るのが心細くなる。

何か忘れ物はないだろうか。何度も確認したが不安だ。昨日、事務所で矢野代表に「何か忘れていいそうで心配ですね。」と言うと、矢野代表は「心配しなくても必ず何か忘れているから大丈夫だよ。」と言い、あっさりその場は終わってしまった。ベラルーシでの滞在を乗り切るためには、これくらいの精神的なゆとりが必要なのかもしれない。

8月20日（金）

ベラルーシ赤十字訪問、ミンスク1番病院訪問



ベラルーシ赤十字では、今回の調査隊に課せられた最も重要な任務である「雪だるま2号」贈呈についての打ち合わせ（本誌11ページ参照）がなされた。重く張り詰めた空気が始終、漂っていた。交渉は矢野代表が行い、私はその様子のメモを取り、写真やビデオの撮影をしていただけだが、ベラルーシ赤十字をあとにしたときには、その場に居合わせていたというだけで、かなりの疲労感が残っていた。



8月22日（日）

「のぞみ21」

スタッフ家庭訪問

今日は工房「のぞみ21」スタッフの家庭訪問をした。甲状腺ガンの摘出手術を経験したエレーナさんは、大きな手作りケーキでもてなしてくれた。はにかみ屋さんのエレーナさんは刺繡が得意で、工房で他のスタッフへの指導もしているそうだ。次に、水頭症のタチヤーナさんは両親そろって迎えてくれた。タチヤーナさんは一人での外出ができないため、工房に行くことはほとんどなく、自宅で作業をしているそう。最後に、工房の経営者であるステファンさん、ナターシャさん夫婦宅に招いてもらった。ナターシャさんはとても料理が上手で、おいしいベラルーシ料理をごちそうしてくれた。これで、次回のベラルーシ料理教室のメニューが決まった。

8月19日（木）

成田 - モスクワ - ミンスク

現在の時刻、モスクワ20時55分、日本は深夜3時。今、モスクワ第1空港で、ミンスク行きの便を待っている。もうすっかり夜と言つていはづの時間なのに、空は夕方、夕焼け色に染まっている。



8月21日（土）

ゴメリへ移動

午後、ゴメリに移動した。何もない道をひたすらドライブ、4時間半。ベラルーシの空は低く感じる。きっと高さを感じさせる山も建物もなく、空と地面とが重なる線が見えるから目が錯覚するのだろう。

ゴメリのホテルは他と違い明るい雰囲気できれいだが、今日はお湯が出ないらしい。



8月24日（火）

10番病院訪問、ブレストへ移動

今日は、ドライバーのタデオシュさん、セルゲイさんとたくさん話すことができた。タデオシュさんとセルゲイさんは、連日、私たちのために長距離の移動を安全にこなしてくれる。みんなの命を預かるのだから責任も重く、体力的にもかなりきつい仕事だ。けれども嫌な顔ひとつしない。



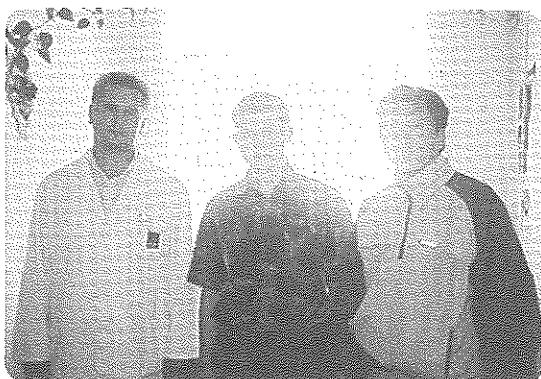
タデオシュさん

8月26日（木）



ストーリンに移動、患者インタビュー

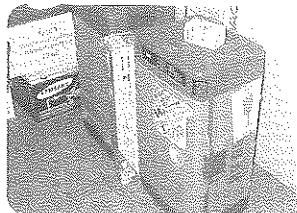
今日は嬉しい再会があった。ストーリン病院でインタビューした青年は、あのヴィクトル少年（写真中央）「チェルノブイリ通信48号」P4に写っている男の子がヴィクトル。だった。ヴィクトルはストーリン第7回検診で診察を受け、ミンスクでの治療・手術を指示された。その後、「雪だるま号」に乗ってミンスクの甲状腺ガンセンターに行き、甲状腺を摘出する手術を受けた。さらに第8回検診で術後の診察も受けている。そして4年後の今、経過は順調そうだ。



8月23日（月）

「のぞみ21」の工房見学、ゴメリ州立内分泌病院訪問、ミンスクへ移動

深夜23時。心配事があって眠れない。明日はミンスク10番病院の訪問を予定しているが、何も支援物資を手配できなかった。年々、ベラルーシの税関は厳しくなり、医薬品などの持ち込みは困難



支援物資の数々

になっている。このため、今回は全て現地購入。ブレストやゴメリの病院用のホルモン剤だけ事前に注文し、残りは現地で打ち合わせて買う予定だった。しかし、こちらの会社はドイツから製品を仕入れているため（ベラルーシ製のものはない）、注文してから届くまでに1ヶ月半くらいかかるという。こうした経緯で10番病院には何も用意できなかった。明日の訪問が心配だ。

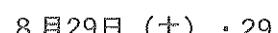
8月25日（水）

ブレスト内分泌診療所訪問、 ブレスト要塞見学



午前中、ブレスト内分泌診療所を訪問。チェルノブイリ支援運動・九州が、甲状腺ガン検診の拠点としている病院だ。3月に広島に研修に来ていたアリーナさん（写真左）もここにいる。彼女が載っている「チェルノブイリ通信59号」を渡すと、とても喜んでくれた。ブレストには支援運動・九州の現地スタッフであるリューダも同行してくれたが、このところずっと体調が

すぐれないらしく、つらそうだった。リューダも甲状腺の摘出手術を経験している。身体の不調は、10年以上飲み続けてきたホルモン剤の副作用ではないかと言われている。これからも飲み続けなければならないのに。



8月29日（土）・29日（日）

ミンスク - モスクワ - 日本

モスクワ空港で乗り継ぎのため、12時間くらいつぶさなければならない。成田行きの便を待っていたら、続々とビジネスマンや観光客らしき日本人たちがやって来る。ここだけ、もう日本だ。

予測ていなかったトラブルや失敗もあり、滞在中にロシアの航空機が墜落するという事件もあったが、今回もみんな無事に帰国することができて本当によかったです。

8月27日（金）

午前：ミンスクに移動

イリーナさん、リューダに
インタビュー

昨日は大雨だった。今朝からもずっと降り続いている。8月なのに、日が差さないと本当に寒い。もう秋だそう



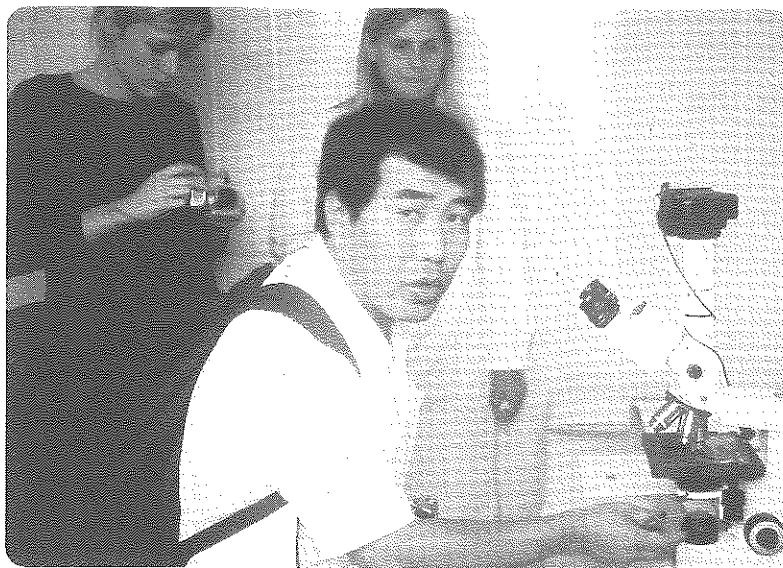
イリーナさんに質問する西首さんだ。秋は雨の季節だとリューダが教えてくれた。

みんなが、現地NGO「コンフィデンス」の代表イリーナさんにインタビューをしている間に発送の手続きを行き、「のぞみ21」で仕入れて来た民芸品を日本に送る手続きをした。国際宅急便を利用するのは、今回が初めての試みだ。うまく行けば、今後、「のぞみ21」の民芸品を定期的に購入することができるかもしれない。中に入っている物の種類、数、単価と合計金額まで全て正直に申請しなければならない。

チエルノブイリ調査隊報告

命の大切さ、命輝く生き方を

子どもたちに伝えるために



小山 浩一（おやま こういち）

2002年より日田郡中津江村立中津江小学校勤務。平和・人権・環境などの学習を通して「命」について考える取り組みを実践。障害を持つ友人ととの交流、福岡県筑穂町の産廃処分場見学、チエルノブイリ原発の学習をはじめ、夏休みのキャンプを原爆の火の燃え続けている福岡県星野村で行い、また秋の修学旅行では、長崎での原爆学習とともに水俣での水俣病学習も予定している。

小学校で「命」をテーマに子どもたちと学習を続けています。「命」を脳かすものは何か、命輝く生き方とはどんなものかを追求しています。そのために「命」と関わる人や事物を、借り物の資料からではなく、本物との出会いを通して学び、自分の人生の土台としてほしい。そんな願いから、勤務している大分県日田郡の中津江小学校の7人の6年生とも、5年生の時から平和・人権・環境などの学習を通して「命」にせまってきました。

8月6日の平和学習では、全校69人の子どもたちに、広島の折り鶴の少女、佐々木禎子さん、イラクの白血病の少女サファア、そして今回ベラルーシでお会いすることになるリューダ・ウクラインカさんを紹介しました。原爆、ウラン弾、原発事故と形はちがつても放射能のもたらす影響の恐ろしさは同じであることを話しました。

しかし、どんなに恐ろしいことなのかを正しく伝えることは難しいことです。私自身が知りません。2000年に福岡でリューダさんたちの話を聞いたものの、自分の日で現地の状況を確かめて子どもたちに伝えたい。そんな思いを持ち続けていた中で、支援運動・九州のチエルノブイリ調査隊の案内に接し、迷うことなく申し込みをしました。

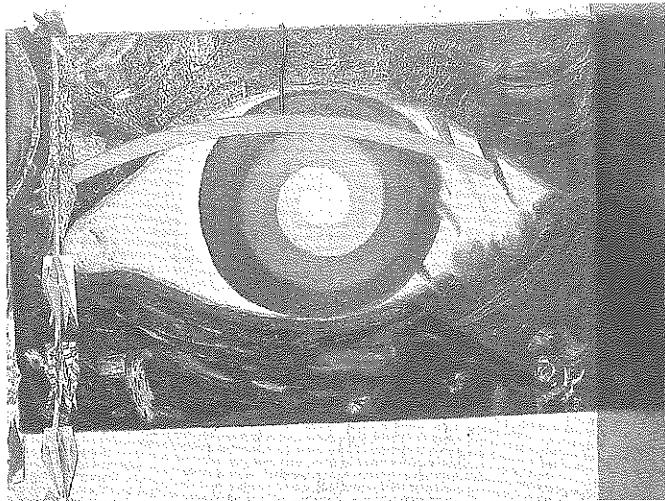
「雪だるま2号」募金活動に一緒に参加してくれた家族も、また中津江小学校の子どもたち、職員も快く送り出してくれ、11日間のすばらしいベラルーシの旅からたくさんのこと学ぶことができました。

多くの人の期待を胸に降り立ったベラルーシは本当に美しい国でした。映画「アレクセイと泉」そのままに、広大な畑と森の国。首都ミンスクでさえ、街のすみすみまで木のあふれる緑の国でした。修学旅行の下見で8月初めに訪れた水俣も海の青と森の緑の鮮やかな美しい町でした。こんな美しい国や町が世界にも類のない恐ろしい災禍に見舞われた運命の皮肉を思わずにはいられませんでした。

驚きと喜びの連続だった旅のどこをどう伝えたものか、限られた紙面では困難ですが、これまでの支援活動の実際を知らない者として、まず伝えたいことは、今回訪れたミンスク、ゴメリ、ブレスト、ストーリン、それぞれの土地の人々に、チエルノブイリ支援運動の足跡をしっかりと見ることができたことです。現地とのコミュニケーションの難しさから来る個々の問題はあるものの、長年に渡る地道な支援の積み重ねが確かに感じられ、これまでの努力に敬意を表したいと思います。

さて、私は何を学んだのか。過密スケジュールの中で、日本のみなさんに、とくに学校の子どもたちに伝えることをどう記録するか。私が最も重視したのはデジカメによる記録です。私が見落としたり、忘れたこともカメラは覚えてくれます。可能な限りたくさんの写真を何百枚と撮りました。その何百枚の中から、私にとつてとくに意味深い何枚かの写真を紹介することを通して、私の学んだことをお伝えしたいと思います。

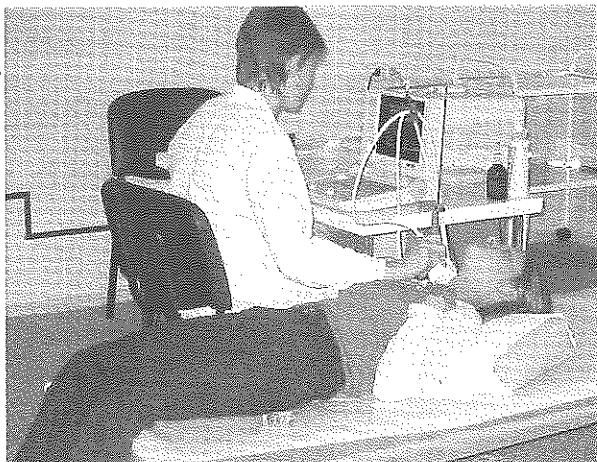
オレグの「眼」



ゴメリ市にある工房「のぞみ21」のステファンさん、ナターシャさんのご自宅を訪問し、ナターシャさんのすばらしい手料理をごちそうになりました。福岡でお二人の話を聞き、亡くなつた息子さんのオレグのことも知識としては知っていました。だれもいない部屋に入ると壁にオレグの写真。初めて見るオレグはやさしそうに微笑んでいました。その写真の横に一枚の絵。大きな「眼」を中心とした抽象画です。じつと見つめていると、突然うしろから「オレグ。」とステファンさんが悲しい顔つきで教えてくれました。「オレグが描いた。」という意味です。その時はじめて、息子を失つた両親の本当の悲しみが伝わってきました。私達を心から温かく迎えようとしてくれる二人の思いの根元に、その深い悲しみのあることを感じることができました。

18歳の少女の検診

の年（87年）以降に生まれた子どもたちに原発事故による甲状腺ガンはないはず。悪性腫瘍病院の先生も「甲状腺ガンの問題は百年で終わる問題。」と言つていました。この18歳の少女は、学校の検診で異常が発見され、悪性腫瘍病院で見てもらっていることでした。百年で終わる問題だとしても、甲状腺ガンの手術を受けた人々は生涯、チロキシンを必要としています。支援運動の使命はまだまだこれからも重要だということを痛感しました。同じ病院のアリーナさんは、顕微鏡で細胞を検査していました。ガン細胞も見せてもらいました。日本で学んだことを生かして検診の最前線で働く先生達を力強く思いました。



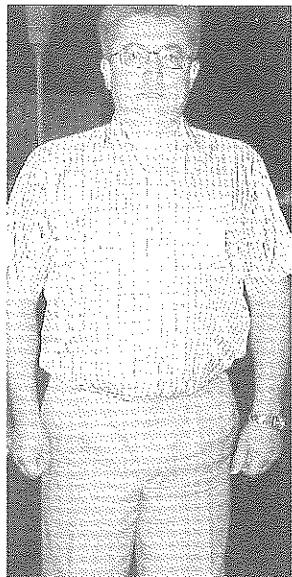
ブレスト市悪性腫瘍病院。アルツールさん、ウラディミールさんに案内されて入つたエコーの検診室。実際にエコー検査が行われています。中年女性の次に入ってきたのはまだ幼い感じの残る少女。1986年に生まれた少女とのこと。甲状腺ガンのリスク・グループ（86年に0歳から18歳）の中で一番若い世代の若者です。放射性ヨウ素の半減期は2週間なので、次

コンフィデンスの イリーナさん



帰国の前日、現地のNGO「コンフィデンス」のイリーナ・アリノヴィチさん（左から2番目）がホテルに来てくださいました。イリーナさんの娘さんは白血病になり、同じように苦しむ子を持つ親などで支援のための団体を作ったとのこと。チエルノブイリ被災者へのあらゆる面の支援、若い人の健康啓蒙教室の開催、出産後の母子に汚染されていない食事を供給したり、汚染のない土地で長期に療養させたりなどの支援活動を行っています。「国は何もしてくれませんでした。」といふ言葉には強い怒りがこめられていました。それなら自分たちでやっていこうと、13年間に渡つ活動を続けてきました。支援活動のあるべき姿を見せてもらつた気がします。

運転手セルゲイさん



ミンスクを中心に三地方へ合計約2000キロの道のりを安全に（でもかなりのスピードで）運転してくれた二人の運転手さんとは、言葉が通じないもどかしさを感じていましたが、24日夜の食事でウォッカを傾けあい、いつべんで仲良しになりました。国際赤十字の職員で、私たちに同行したイリーナさんの英語にも助けられて盛り上がつたのはいいのですが、次の日は二日酔いでたいへんでした。でも、心が通い合う楽しい機会が持ててたいへんうれしかつたです。言葉と言えば山田さん、マリーナさんに大いに助けられましたが、ロシア語が話せたらどんなにいいだろうと思いました。

工房「のぞみ21」へ 小山家から鶴をプレゼント

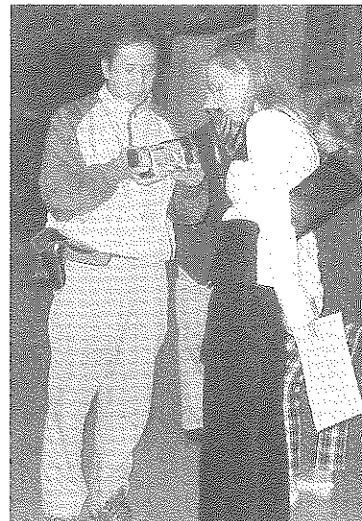
娘が中心になつて鶴を折り始めました。千羽鶴とは行きませんでしたが、家族の思いを必ず届けようと、ナターシャさんに手渡すまで壊れないよう日に大事に運びました。「のぞみ21」のみなさんにも家族の話を伝えました。ここで作られた品物をたくさん購入し、参加の4人で分け合つて日本まで苦労して持つて帰りました。「のぞみ21」のみなさんが一生懸命作つている様子も見えてきました。かわいらしい品物ばかりです。みなさんたくさん買って下さい。新商品の携帯電話入れは今後ヒット商品になるのではないかと期待しています。私はマトリヨーリ・シカ・キーホルダーをどつさりと。矢野代表とお揃いの麻のシャツも購入（矢野さんはちょっと嫌そうしていましたが・・・）。



ゴメリの「のぞみ21」

を訪問しました。最も行きたかった場所の一つです。わが家のみんな（妻と4人の子ども）で、ステファンさん、ナターシャさん、エレーナ・ノビコワさん、リューダさんの話を聞きました。福岡市に行つたのは4年前。今回の旅が近づいてくると中2の

リューダのビデオレター



写真ではありませんが、帰国前日は何よりのおみやげができました。リューダから中津江小学校の子どもたちへのビデオレターです。ペラルーシで彼女に会った日からブレスト・ストーリンへの道中をずっと同行してくれ、その間も中津江小での取り組みを少しずつ話していましたが、彼女はきちんと聞いてくれていて、これまで自分に起きたことをくわしくビデオに向かって話してくれ、同じような災禍が一度と日本でも世界でも起ころうのように、とのメッセージをくれました。このビデオレターを見て、「先生から聞いた遠い国の話」ではなく、リューダという人を通して世界がつながっていることを中津江小の子どもたちはきっと感じてくれるでしょう。学校で中津江の子どもたちにこのビデオを見せる日が待ち遠しく思われます。

さいごに



『アレクセイと泉』セット 限定販売2500円!

(映画「アレクセイと泉」が子どもにも読みやすい絵本になった！
「いのちは、みんなつながっている。世界じゅうの子どもたちに伝えたいこと」
「アレクセイと泉」でお年寄りのみなさんが歌った歌詞を歌詞カードで
お届けします。この売上は、ペラルーシ支援にあてられます。

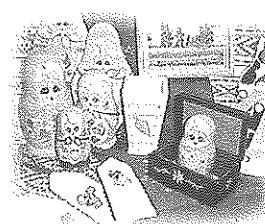
内容：「アレクセイと泉のはなし」1冊
ペラルーシ支援コーヒー2つ

* アレクセイと泉のはなし

アリス館 定価 1300円 + 税 写真と文：本橋成一

「いのちは、みんなつながっている。世界じゅうの子どもたちに伝えたいこと」

ペラルーシ原発事故により、放射能に汚染されたブジシチエ村。ただひとつ、そこにある泉だけは奇跡的に汚染されていません。泉とともに生きる青年アレクセイと村の人々の様子が、きれいな写真絵本になっています。



工房「のぞみ21」の作品、新たに入荷しました。 ご注文、お待ちしております！！

連絡先

ペラルーシ支援運動・九州 事務局

福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16 (株)ウインドファーム内

TEL・FAX 093-203-5282

ベラルーシの旅・切尔ノブイリ調査隊報告



切尔ノブイリへの募金を呼びかけて12年 はじめて訪れたベラルーシでの支援の現場

文/西首 延子

西首 延子（にしくび のぶこ）

1962年、長崎県庁入庁。長崎県職員組合女性部長、同県職員組合副部長を歴任。12年間、切尔ノブイリの被災者への募金活動続け、今回、はじめて支援活動の現場を見るため、切尔ノブイリ調査隊に参加。

支援の現実に触れるために

参加した切尔ノブイリ調査隊

現場自治労長崎県職員組合女性部が、切尔ノブイリ原発事故被災者救援カンパを取り組んで12年になります。毎

月9の日に出勤する職員へビラを配布しながら1円玉募金を呼びかけ、年2回切尔ノブイリ支援運動・九州（以下支援運動九州）に送りました。18年経った今、切尔ノブイリはどうなっているのか、私たちの支援はどう活かされているのか、今後、何が必要なのか、自分の目で確かめようと思いまして。

8月19日、成田から、モスクワ経由でミンスクへ、乗り換えの連絡が悪く、ミンスクへ着いたのは、予定より遅れて午前1時30分。深夜だというのにベラルーシ赤十字のロマノフスキーリ裁の出迎えを受け驚きました。

翌日、ベラルーシ赤十字を訪問しました。総裁から支援に対する感謝と、特に雪だるま号がミンスクから遠く離れたブレストやストーリン地区などからの患者の輸送に大変役立っている。雪だるま号になるのを期待しているとあいさつがありました。その後で自治労長崎県職員組合女性部に対して感謝状贈呈があり、突然のこと驚きました。長年の私たちの小さな

取り組みが評価され、大感激でした。

帰国後、女性部のみなさんに報告し、これから運動の励みにしていただきたいと思います。

今回の訪問の一つに雪だるま2号の

贈呈がありました。国が違えば、寄付一つでもいろいろな手続きがあり、寄付についても50%の税金がかかると

いうことでした。この問題解決のため一度銀行に入れ、切尔ノブイリ被爆者支援の車購入費に充てる条件で書類を作成しました。金の受け渡しについても、札ナンバーを一枚ずつ控えていく念の入れようで、これには

驚きました。みんなが待ち望んでいる雪だるま2号が、患者を乗せて、広大なベラルーシ内を走り回る日が1日も早く実現することを願わずにおりません。

工房「のぞみ2」との出会い

気になる今後の経営

翌日は、ゴメリ州へ移動。山が全くない、行けどもいけどもただまづぐな道を車で走る。日本のようにドライブインがあるわけではなく両側は果てしなく広がる畑と時々見かける牛の放牧。民家があるところではりんごがたくさんのなっていました。途中での昼食は、おいしいロシヤのスープとボリューム

たっぷりのバーべキュー、夕食分まで
食べました。

ゴメリでは、「のぞみ21」のスタッフの自宅を訪問しました。ナターシャさんは案内でエレーナさん宅を訪問。彼女は17歳で両方の甲状腺を摘出し、ホルモン剤を服用しています。結婚して夫と二人暮し。手術を受けたあとは、8時間労働はできないので、「のぞみ21」で働いています。すばらしい刺繡の技術を持つています。

ました。一応、レシピは聞いたものの、果たしてこの味は出せるかな？

「のぞみ21」は運営が大変厳しいようです。それは、この国の政策にも問題があり、障害者が働く施設なのに国との支援がほとんどない。それどころか、製品を作ると売れなくとも税金を納めなければならぬから、あまりストックができない。かといって大量に生産はできないのでその調整が難しい。マトリョウシカなどを仕入れて来たので皆さんのご協力を！

検診の現場・ブレスト

ストーリンを訪ねて

女は一人で外出ができないので、自宅で刺繡をしています。両親と3人暮らしお。父親は運転士、母親はマンショングの清掃、彼女の障害者補助金で生活しているのですが今後がちょっと心配。家庭訪問の後は、ナターシャ宅を訪問し、手作りの料理で歓迎してもらいました。

ロマノフスキイ総裁から感謝状を受ける西首さん

アルツールさんは、診療所までこれない人のために検診チームを組んで汚染地も非汚染地も含めて、月20日ほど回っている。1999年から12万人の検診

交通事故の問題

雪だるま抄

ストーリン地区中央病院で面会した
青年ビクトルは、2000年の支援運動
九州の検診で甲状腺がんが見つかり、
マンスクリ手術を受けています。当初
は雪だるま号があつたので利用できた

支援をしてあげるのではなく、何か現地の人たちと連携しながらの取り組みが必要。支援運動九州はよく

今回の旅を通して私たちの支援が現地の人たちに役立ち、活かされていることを実感しました。今後の課題として医療支援から、次世代を担う人たちへの支援も検討する時期かな。しかし、支援するのも大変であることも実感！ 支援をしてあげるのではなく、何が

もちろん、私たちが行つたところは立ち入り禁止区域ではないのですが。
身近にある玄海原発が事故起こした

原発事故は目に見えない恐怖を私たちに与えています。ベラルーシの美しい森や川は汚染され、きのこや魚が汚染されているかもしれないと思うと食べるたびにこれは大丈夫かなと思ってしまいます。原爆と違つて森も川も見た日には何の異常もなく本当に美しい。もちろん、私たちが行つたところは立

が、今はいため、バスか列車で夜出発し、駅で朝を迎える。トロリーバスで病院に行き、早く終わればその日うちに帰れるが、遅くなると駅で一夜を明かして帰るそうです。

を行つてゐる。超音波器等の支援は経済的に厳しい中で大変ありがたい。また、日本での細胞の取り方や染色技術の支援が役立ち、甲状腺がん患者の増加しているのもひとつには技術が向上し、これまで見逃されていたのが発見されているからと思う。事故当時、0～18歳の人たちをリスクグループとして特に注意深く診ていると話されました。

このようなきめの細かい取り組みと医療技術の向上で甲状腺がんの早期発見が進んでいます。

しまいます。原爆と違つて森も川も見る日には何の異常もなく本当に美しい。もちろん、私たちが行つたところは立入り禁止区域ではなゝのですが。

かの上に立つてゐるのですが、
身近にある玄海原発が事故起こした
らどうなるでしょう。

があれば無料でチロキシン(ホルモン剤)がもらえます。一般の人は有料。ちょうど説明を受けているとき、女性が甲状腺のエコーを撮つていました。彼女は18歳。首にしこりを感じて診察に来

今回の旅を通して私たちの支援が現地の人たちに役立ち、活かされていることを実感しました。今後の課題として医療支援から、次世代を担う人たちへの支援も検討する時期かな。しかし、

たという。

支援するのも大変であることも実感！

交通事情の問題

必要が現地の人たちと連携しながらの取り組みが必要。支援運動九州はよくここまでがんばった！

青年ビクトルは、2000年の支援運

卷之三



道遠く、雪だるま2号、未だ走れず

チェルノブイリ調査隊「雪だるま2号」関連報告

文/矢野宏和（チェルノブイリ支援運動・九州）



雪だるま2号につけられる予定のステッカー

既に廃車になった相手の車を雪だるま2号が走らせる

旅が終わり、飛行機がミンスク空港からふわりと浮かぶ。緑の地平の果てへと伸びる細い道を、蟻のごとき小さな車が這い進んでいくのが見えた。

自然と想いは今回の訪問で

購入が叶わなかつた「雪だるま2号」の方へと向い、無念の気持ちが込み上げてくる。この旅のなかで、幾度私は溜息をもらしかつた。その数だけ、歳をとつてしまつたよう気がする。

今回の調査における一番の驚きは、購入費用の300万円がフォルクスワーゲンの車に姿を変えるまでには、来年までかかるということだつた。その理由は、300万円の車を購入するのに、140万円の税金が課せられることに起因する。つまり、チェルノブイリ支援運動・九州は、雪だるま号の購入費用300万円に加えて、140万円を用意しなければならないのである。

チェルノブイリ支援運動・九州の方にそんな資金的な余裕はないし、仮にあつたとし

ても、会員の皆様からお寄せいただいた貴重なカンパを、ベラルーシという国家に支払う税金にあてることについて、運営委員や会員の合意は得られないであろう。

ペラルーシ赤十字に寄贈され、検診チームの、あるいは現地の患者の移動手段として利用される雪だるま号にまでも課せられる140万円の税金……。それがどうしても腑に落ちず、また漏れる溜息。

これから購入しようとしているのは、6年間、現地で活躍してきた雪だるま号の後を受け継ぐ車なのだ。そうした実績も評価して、140万円の税金を免除してくれてもいいのではないか。

ペラルーシに赴く前、そんな想いをまずペラルーシの日本大使館に伝えて、何とか税の免除の協力を仰いだが、返答は、「ペラルーシの国の問題であり、日本側としてできるることは何もない」という予想通りの、そして当たり前の返答しか得られなかつた。

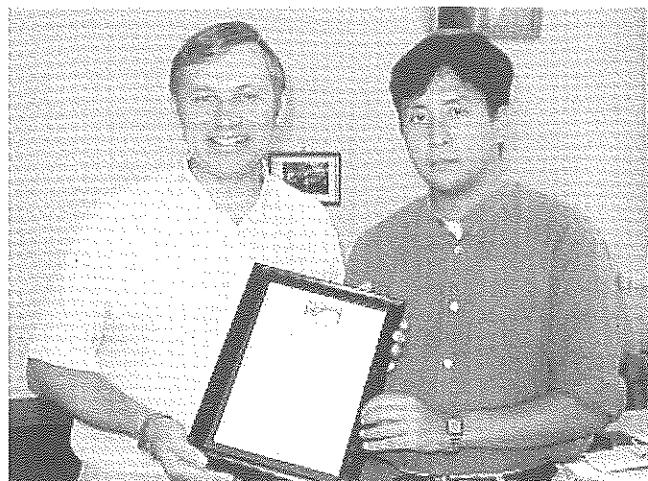
一方、日本にあるペラルーシの大使館にも連絡をとつてみたところ、積極的に相談にのつてくれ、何とか免税の可能性を探つてみてくれるとのことだつた。

そして最終的に雪だるま号の購人に関する140万円の免税の問題は、ペラルーシ赤十字ミンスク本部のアントン・ロマノフスキイ氏に委ねることになる。

8月20日、ミンスクの本部でロマノフスキイ氏と会談して、雪だるま2号購入に関する問題については、次のようないいではないか。

まず雪だるま号の購入費用である300万円を、ペラルーシ政府が50パーセント以上の株を所有する銀行に預ける。同時に、その預けた300万円で購入する雪だるま号の使用目的（検診団や現地の患者の移動手段）を記載した寄付申請書を提出する。

そして、300万円の存在と購入する車の使用目的を明確にしたうえで、大統領府の



雪だるま2号へのカンパを寄せて下さった方の名簿を贈呈する

ルカシエンコ大統領に免税を認めてもらいうための交渉が始まる、という手順である。

一瞬、目の前が暗くなつたように感じたのは、その交渉に、「今年いつばいはかかる」と聞いたときだ。つまり、雪だるま号の購入は、来年以降になるということだ。

信じられなかつた。何でそんな時間がかかるのか。私は「来月いっぱい」と聞き違えたのではないかと思つた。

私たちが検診を行つてゐるストーリンやブレストから、ミンスクまでは車で4時間程度。しかしバスや電車とな

ると7時間以上かかる。検診や治療のためミンスクを訪れる患者は、病院での検査や治療を終えた後、駅で夜が明けるのを待ち、それから帰途につく。その行程を、雪だるま号であれば日帰りで行き来できるのだ。交通費の負担もない。

雪だるま号によるそうした移動手段の確立は、医師や臨床検査技師が迅速に甲状腺ガ

ンを発見するためのシステム作りと同様に、この7年間の取り組みを通して実現した最も現地の患者に喜ばれる支援ではなかつたか。「とても助かつた」という現地の声（p9西首さんのレポート参照）は、支援活動に専わる者にとっては心が震えるような喜びと達成感を与えてくれる。

ああ、しかし、それならば何故、雪だるま号が整うまでに、来年まで待たなければならぬのか。せめて、冬が来る前に……。

初代雪だるま号が30万キロを走破し、廃車になつたのは1年前。それに、雪だるま2号の購入費用が集まるまで

かるということは、今年の冬もミンスクまでバスや電車で通わなければならぬということになる。

雪だるま2号の購入に向けて、300万円のカンパがようやく集まつたとき、誰もがこれですぐに雪だるま2号ができると思つたことだろう。今回のチエルノブイリ調査団の移動たつて、当初は雪だるま2号を使って行う予定だったのだ。

もどかしさは、募るばかりである。

これが、国際間の支援の難しさというもののだらうか。ある程度、こうして取り組みのなかで慣れていたつもりだつたが、今回の雪だるま2号をめぐるものなどかしさに関しては、この7年間の取り組みのなかで慣れていたつもりだつたが、今回の雪だるま2号をめぐるやり取りは、やはり心に痛かつた。日本までの10時間という飛行時間を想い、それ以上に遠いこれから支援を想い、またひとつ、溜息がこぼれる。

今後の支援活動を継続していくうえで、超えていかなければならない課題を残して、今回の旅は終わつた。

チエルノブイリ支援運動・九州
矢野 宏和

松下龍一さんのこと



チエルノブイリ支援運動・九州が1990年に結成された際、呼びかけ人としてこの活動に関わり、その後も著作を通して命の大切さを伝え続けてこられた松下龍一さんが、去る6月17日、病気のためお亡くなりになりました。松下さんは作文集「私たちの涙で雪だるまが溶けた」が発行された際も、解説文を寄せて頂き、毎年、カンパを送ってくださいました。今後、私たちがチエルノブイリの支援を長く続けていくために、粘り強く平和の問題に関わり続けてこられた松下さんの姿を、しっかりと心に焼き付けておきたいと、思います。

謹んで、ご冥福をお祈りしたいと思います。

（チエルノブイリ支援運動・九州 運営委員一同）

Chernobyl Disaster and its Impact on People

「これからチェルノブイリに取り組もうとしている長崎の人が事務所に来る」と聞いたとき、私はいったいどんな人が来るのかと、想いをめぐらせた。

Chernobyl の原発事故から 18 年が経つ。その後も人は地球上で絶えず核や放射能の問題を起こし、あらゆる命を脅かし続けている。それゆえ、 Chernobyl の出来事はすでに過去の方へと押しやられ、人々の関心は薄れている。そんな中、例えばイラクやアフガンの問題に关心を持つ人は身近にいても、 Chernobyl に関わっていこうと人は、こちらから働きかけない限り、そう簡単には現れない。極めて希なのだ。なぜ、今、 Chernobyl のなのか。やがて Chernobyl 支援運動九州の事務所に訪れ、佐々木さんに、私はその疑問をぶつけてみた。その話を聞き終え、その場で原稿依頼して届けられたのが、このレポートである。

(編集・矢野宏和)



佐々木さんがペラルーシで
出会った子どもたち。 Chernobyl
ノブイリに関わる気持ちが固
まつた。

する夜が多くなりました。すると必然的にチエルノブイリの問題に出交わし、長崎と同じ被爆地である事を知り、又、18年前に見たニュースを思い出しました。大変な惨事で、この遠く離れた日本にも放射性物質が飛散し、牛乳の安全性を危惧したと記憶しています。そして、外務省の海外安全ホームページを見ると、ベラルーシでは、今尚、莓、苺、

そもそもヘラルードとの出会いは、オリガというベラルーシの女性と知り合った事から始まりました。日本語が話せない彼女と私は、英語で意思疎通ができました。互いの母国語は理解できなければ、英語を共通語として話すというのは、英会話習得中の私にとっては大変エキサイティングな経験でした。それから、見知らぬ国ベラルーシに興味を抱き、インターネットで検索

私がベラルーシで得たものは、不思議な巡り合いで、5キロの脂肪、そして決してお金で買えない貴重な体験でした。しかし、私自身不思議でならないのは、何故、ベラルーシへ行つたのか？去年の今頃は、ベラルーシという国名すら知らなかつたのに。今では、ベラルーシの被ばく者を支援する団体を作ろうとしているのですから。

キノコ類、乳製品は、放射能汚染の可能性があるから食べないようにと記されていましたので、私は驚きを覚え、すぐさま、前述の内容をオリガに聞いたところ、「何故? 長崎は、原爆が落ちたでしょ。長崎はいつから安全になつたの?」と問い合わせられた私は、「知らない」としか答えられず、自分の無知に腹が立つ程恥ずかしい思いをしました。その後、私なりに原爆と Chernobyl の性質も、規模も違う事が分かりましたが、共通するところも多くあり、その中で私の注意を引いたのが、被ばく二世の問題だつたのです。この時点では、私は、自分が目ので現状を見たいと思いました。今までの無知さをリカバリーする為にも。又、同時に、ベラルーシにビジネスチャンスは無いだろうかとも考え、中古車、電化製品、保険、不動産、飲食店、スーパー等について調べたい欲求にも駆られました。すると、自然と一般市民の生活についても知る必要があります。それらの目的をもつて私は、単身ベラルーシへ行くことになつたのです。



ミンスクの第二子ども病院にて

こと3日。その間、市場調査をしたり、一人で気ままに市内見物したりして朗報を待っていました。

そしてついに、現地のボランティア団体の協力で、第2子供病院の訪問が実現しました。子供達へのお土産として折り紙セットを20組と現地で買ったお菓子とジュースを段ボール2ヶ月分を持って行きました。子ども達は、珍しい小さな東洋人に興味を示し、カメラを向けるとニッコリ微笑む少女や、ベッドから飛び出して写りたがる男の子、ささやかなプレゼントにも皆喜んでくれていました。しかし、私は、あまりの多さに驚いていました。

次から次へと病室を回り、最後に、特別に集中治療室に案内されました。そこには、大きなベッドに横たわる小さな子供らの姿がありました。カメラを向ける事にためらい、ましてや、名前や年齢を聞く事などできませんでした。でも、その中の一人の少女の姿を、

泊75ドルのホテルに泊りましたが、この料金が20才代の事務員の1ヶ月分の給料と知り、ワンルームのアパートを1日25ドルで借りました。一夜明けて、やっぱりホテルに戻ろうかなーと思ふ位、快適ではありませんでした。

ホテルにしてもボロアパートにしても、夕食を済ませて帰つて来れば、シャワー浴びて洗濯して眠るだけですから。我慢、我慢。病院訪問は、簡単な事ではありませんでした。何分、何の肩書きも後立ても無い個人なのですから。そこで、日本大使館へ行き、協力をお願いしたところ、渡航前に外務省を通じ、ベラルーシ政府の許可を得なければならぬので、今回は諦めて下さいとのことです。諦める訳にはいかないでの、オリガに頼んで、返事を待つ

こと3日。その間、市場調査をしたり、一人で気ままに市内見物したりして朗報を待っていました。

そしてついに、現地のボランティア団体の協力で、第2子供病院の訪問が実現しました。子供達へのお土産として折り紙セットを20組と現地で買ったお菓子とジュースを段ボール2ヶ月分を持って行きました。子ども達は、珍しい小さな東洋人に興味を示し、カメラを向けるとニッコリ微笑む少女や、ベッドから飛び出して写りたがる男の子、ささやかなプレゼントにも皆喜んでくれていました。しかし、私は、あまりの多さに驚いていました。

次から次へと病室を回り、最後に、特別に集中治療室に案内されました。そこには、大きなベッドに横たわる小さな子供らの姿がありました。カメラを向ける事にためらい、ましてや、名前や年齢を聞く事などできませんでした。でも、その中の一人の少女の姿を、

泊75ドルのホテルに泊まりましたが、この料金が20才代の事務員の1ヶ月分の給料と知り、ワンルームのアパートを1日25ドルで借りました。一夜明けて、やっぱりホテルに戻ろうかなーと思ふ位、快適ではありませんでした。

ホテルにしてもボロアパートにしても、夕食を済ませて帰つて来れば、シャワー浴びて洗濯して眠るだけですから。我慢、我慢。病院訪問は、簡単な事ではありませんでした。何分、何の肩書きも後立ても無い個人なのですから。そこで、日本大使館へ行き、協力をお願いしたところ、渡航前に外務省を通じ、ベラルーシ政府の許可を得なければならぬので、今回は諦めて下さいとのことです。諦める訳にはいかないでの、オリガに頼んで、返事を待つ



ミンスクの第二子ども病院にて

映像では、感じられないものを私は感じ、ショックを受けました。うまく言葉せませんが、自分で中で何か変化が起つたと感じました。何かしら、もどかしいような、罪悪感を感じているような妙な心もちでした。

ミンスクを離れる日を迎え、オリガと友達に別れを告げ、搭乗し、指定の席に座ついたら、前方から日本人らしい男性が、「あなた日本人?」と話しかけられ、「はい」と言うと、彼は、私の隣の席に座るなり、「こんなとこ、何しに来たの?」と聞かれ、ありのまますと、やおら彼は、名刺を差し出し、見ると、「日本ベラルーシ友好協会 佐々木 正光」と書いてあるではないですか。思わず、「私も佐々木です。」

佐々木正光氏の紹介で、帰国後、長崎大学医学部の山下俊一教授と知り合ったことができ、チエルノブイリ関係の沢山の資料を頂き、とても参考になりました。たつた一度の思いつきの海外旅行で、貴重な体験と、多くの人達との出会い、そして、それが広がっていく事に本当に驚いています。そして、夜毎食べたロシア料理は大変美味で、知らぬ間に5キロも太つていきました。これには、誰もが驚きました。

今後は、長崎の人達にベラルーシ、チエルノブイリのことを知つてもらうよう活動し、私の様に知らなかつた人々、無関心な人達を仲間として増やしていくことを思つています。チエルノブイリ支援運動・九州の皆さんには、これから色々と教えて頂く事になると思います。宜しくお願ひ致します。

(文・佐々木尚之)

手島さんとチエルノブイリ支援運動。九州との出会いは、「チエルノブイリに行ったつもり学習会」。新聞の告知欄で見たこのタイトルが気になった手島さんは、半分疑いの気持ちを抱きながら来てくれたという。それを聞いて、おかしなタイトルにしておいてよかった、と思った。

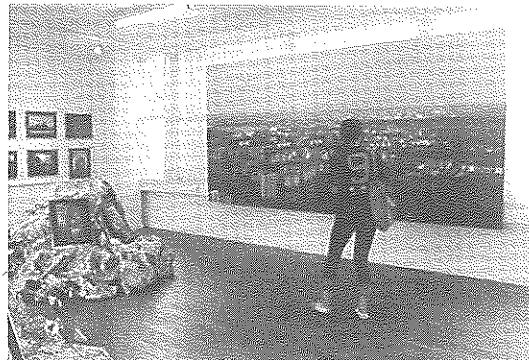
手島さんの写真は、山里の廃校が生まれ変わった美術館『共星の里 黒川INN美術館』の2階に展示してあった。「よく来たね！」手島さんは、いつもの少年のようなくしゃっとくずれる笑顔とかたい握手で迎え入れてくれた。その場所はもう、わたしのよく知っているいつもの学校の教室ではなく、手島さんによって違ういのちを吹き込まれ、しづかにわたしたちに語りかけていた。

手島さんは、これまで3回ウクライナを訪れた。きっかけは5年前の新聞。「旧ソビエト連邦で、今後年間に4～5万人の人達が放射能の影響で死んでいく」との記事を目にしたのが、始まりだった。「何故だ！」の想いが手島さんを突き動かし、その原因となったウクライナ・チエルノブイリ原子力発電所へと導いたのだった。

取材・文 谷口 恵（チエルノブイリ支援運動・九州事務局長）

ミサイルが飛んでくる？

大きなパノラマ写真は、中央にチエルノブイリ原発、奥には大陸弾道弾のレーダー基地が見える。緑があふれ、川が流れるこの風景の中に、異様な大きさと堅さでガソンコに居座っている。手島さんは、ヘリコプターをチャーターして上空からこの写真を撮影した。「もっと近くまで行つてくれ」と注文すると、「ダメだ」という「どうしてだ、もつと近寄つくれ」とすると、「ミサイルが飛んでくるからダメだ」と言ふ。原発の上を飛んだらミサイルが飛んでくる……？ 実は、それはパイロットが原発に近づきたくないがためのウソ。今もチエルノブイリ原発上空には強い放射能が満ちている。「GO！ GO！」「NO！」としばらく繰り返したが、結局それ以上近づくことをパイロットは拒み続け、至近距離からの撮影はできなかつた。

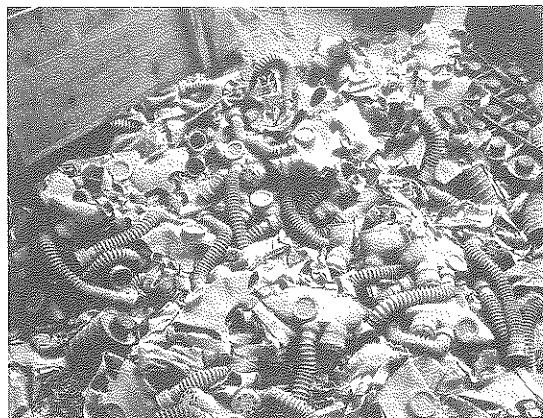


チエルノブイリ原発 3号炉

「石棺」（事故を起こした4号炉は、コンクリートですっぽりと覆われている）に無数に入ったヒビから放射能を放ちつづける4号炉。その隣では、3号炉が2000年まで運転を継続していた。手島さんのモノクロ写真が物語るその3号炉内部の様子は、建設された当時のままなのではないかと思われるほど、旧式で単純な構造。（わたしは、昔のヒーローの中では、エレンコフ光と呼ばれる不気味な光を放っていた。「なんてもあるほどだ。炉心が納められたブルーかな・・・ブルーでもない、紫でもないすごい光。撮影しちゃいけないって言われたんだけど、ものすごい色だつたよ。不気味な色。この世の色じゃない。自然界の色じゃない。」）撮影を終え、3号炉を出ようと放射能測定機をくぐつたその時、ランプが赤く点灯。「まずい！」撮影中に手島さんは、誤つて水たまりに踏み込んでしまっていたのだつた。



チエルノブイリ3号炉、最後の職員



プリピヤチ文化会館、大量に放置されたガスマスク

Chernobyl Pripyat 原発の労働者の町といえれば、事故が起こるまではプリピヤチ市であった。しかし、1986年4月26日を境に、ここはゴーストタウンと化した。目に見えない、においも味もしない放射能。その存在を知らせてくれるのは、一瞬にして振り切れるガイガーカウンター（放射能測定器）の針と警告音だけ。「あんまりピーピー鳴り続けるから、うるさい！」って切っちゃつたこともあつたよ。」と無邪気な笑う。

しかし、ガイガーカウンターだけではなく、手島さんの身体も確実に放射能を察知していた。「ボクの場合は、のどがいたくて、頭がガンガンいたくて、吐き気がして。30キロ圏内であぶに刺されて、キズ跡がまだ残ってるけど、かんてるの全然わからない。アタマがぼーっとしてるから。そのままいいで、死んでるかもしれないね。うちの奥さんが、調子悪くなったらこれを飲むんだよ、って薬をくれていた。それ飲んで、3日目にはよくなった。

「どうして、そんな思いをしてまで？」
「そうたずねると、「やっぱり、風化させたくない。」手島さんの目元をがきりつと引き締まった。「日本でも原発は安全だ安全だというけども、100パーセント安全っていうことはないよね、絶対に。人間が運営したことだから、絶対にヒューマンエラーはある。」折しも、美浜原発事故が起こった直後。思わず深いため息をついた。

プリピヤチの内部は荒れて果てている。あわてて逃げた人達の残していく生活用品、子どもが胸に抱いていたであろう人形、壁にかかっていた

エルノブリ原発の労働者の町といえれば、事故が起こるまではプリピヤチ市であった。しかし、1986年4月26日を境に、ここはゴーストタウンと化した。目に見えない、においも味もしない放射能。その存在を知らせてくれるのは、一瞬にして振り切れるガイガーカウンター（放射能測定器）の針と警告音だけ。「あんまりピーピー鳴り続けるから、うるさい！」って切っちゃつたこともあつたよ。」と無邪気な笑う。

しかし、ガイガーカウンターだけではなく、手島さんの身体も確実に放射能を察知していた。「ボクの場合は、のどがいたくて、頭がガンガンいたくて、吐き気がして。30キロ圏内であぶに刺されて、キズ跡がまだ残ってるけど、かんてるの全然わからない。アタマがぼーっとしてるから。そのままいいで、死んでるかもしれないね。うちの奥さんが、調子悪くなったらこれを飲むんだよ、って薬をくれていた。それ飲んで、3日目にはよくなった。

「どうして、そんな思いをしてまで？」
「そうたずねると、「やっぱり、風化させたくない。」手島さんの目元をがきりつと引き締まった。「日本でも原発は安全だ安全だというけども、100パーセント安全っていうことはないよね、絶対に。人間が運営したことだから、絶対にヒューマンエラーはある。」折しも、美浜原発事故が起こった直後。思わず深いため息をついた。

プリピヤチの内部は荒れて果てている。あわてて逃げた人達の残していく生活用品、子どもが胸に抱いていたであろう人形、壁にかかっていた

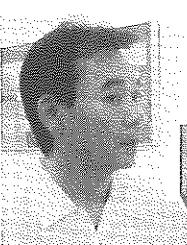
1986年のカレンダー、5月1日になつても避難命令が出されていなかつたことを証明するメーテーの横断幕、微笑む家族の写真、向こうからおしゃべりしながら誰かが歩いてきそうなどのかな散歩道・・・時が止まつてしまつたような光景のその一方で、マンホールからは白樺がたくましく望をめがけてのび続けている。

プリピヤチの文化会館には大量のガスマスクがあちこち山積みにされていた。「空氣をすつて体内被ばくしないように」と用意された。数が足りなくて大変だったみたいよ。親たちが子どものために奪い合いになつた。」得体の知れない、姿の見えない危機に迫られた町の、止まつた時間。その時、いつたい人はどんな行動をとるのだろうか。わたしだったら……？

平穀な家族の日常と、突然の悲劇。対照的であつても実は隣同士にあることなどが数々の写真の向こう側に透けて見える。わたしの生活と重なつた。

当然、プリピヤチにあるものはすべてひどく汚染されている。それでも、今でも強盗が耐えず、外に持ち出されて売られているのだという。高濃度に汚染された物体は、さらに自ら放射線を出して、周囲のものをも汚染する。

手島雅弘 (Teshima Masahiro)
株式会社スタジオクリエイションプラン 代表取締役
スタジオキャバ 代表
JPS (日本写真家協会) 会員



- 1951年 福岡県生まれ
1972年 東京総合写真専門学校卒業
(株)電通本社 写真部にアシスタントとして従事
1975年 独立 フリーとなる
1982年 スタジオクリエイションプラン設立
1996年 シルク・ドゥ・ソレイユ「アレグリア」写真展を「GAYA」、「ホテルシーホーク」にて開催
1997年 スタジオキャバ設立
1999年 「光の中の日本」The Heart of Japan 出品
2003年 「柳川華恋」平野紘子 パンフレット作品集撮影 (西日本新聞社刊)

たくさんの資金を
ありがとうございました。

敬稱略。順不同。

富海 藤原いつみ 武田芳子 石田邦子 国生恵美子
伊藤陽子 大中百合 大島朋子 木田俊一 宮崎正

募金者からのメッセージ
一部抜粋

部友粹

奥田富美子 薩嶋教代 辻野雅子 高山幸子 中江美和 渡辺絹子 藤岡耕子 中村栄子 中西孝子 竹之内純子 豊里美枝子 久保田久美子 木下るみ 仲江 智子 守田篤子 勝連夕子 青木敬子 水木啓介 久保力ヨ子 森田美月 近沢寿子 鍋崎真美子 三宅桂子 岩見文夫 成重まり子 深堀ミチ子 河野貴美子 山本淑子 小門満智子 山下明美 保元内科クリニック 片山富美子 立木敏枝 門司三智子 芝山祥子 松尾美和 橋村明枝 里見照子 サトウ矯正歯科クリニック 橋本貞奈美 大田澄子 三上鍊子 吉本京子 ニック 赤羽千恵子 松元真寿美 前田祐子 古賀えみ子 医療法人かどもと眼科医院 加登本拡 荒木ミネ 林由実子 小糸ファミリー 林陽子 吉田久美子 川原登喜の 緒方ミサ子 太田千賀子 野村伸子 山崎未吉 川カ巳代治・幸子 永利恭子 泰素子 森川キミエ 松永仰一 松尾博文 毛利明子 江藤俊一 原野由美子 木村紀子 南祐子 長棟かおる 丸山さより 佐々木孟 赤尾恭子 中原和代 井上亜紀 有吉みどり 毛利孝 桜井美喜子 横木みつ枝 力武晴紀 尾川浩一 前田・渡辺・中西・沖 森木美樹 緒方優子 井上洋子 珍部千鳥 河中博子 桃島真由美 荒木潔枝 落石久子 緒方貴穂 富水勤子 桜木秩子 口高太 引田良子 ミヘイチグレゴリー 山田美佐子 永山セツ 入出すま子 岩松繁俊 大谷正穂 島田まゆみ 椿原まり子 稲吉清子 内田ケサエ 華井紀子 桃島一郎 桂木美由紀 梅田玲子 熊谷淳二 中嶋眞智子 吾郷成子 福田英一 歌野秀子 伊藤陽子 久

戸高久美子 松井口美 宮本カズコ 清原凡美 山カタ
隼史 松カ光子 深町直子 永尾妙かり 梶村静江
川崎君子 野中孝子 森田正則 久保田法子 藤井千
鶴子 首藤辰子 吉村啓 村田史枝 藤田順子 宮西
いづみ 佐藤一司・一江 中村華枝 多田宏美 新井
不動産販売㈱ 澤田和子 渕レディスクリニック理事
長瀬利雄 桑山道子 大野安則 ぼこあぼこ 英空寺
二木和 岡田薰 宮西いづみ 村上和代 龜井廣子
之内真吾 菊池順子 篠豊互助会 じやがいものおう
ち 大庭里美 安成奈美 松本弘子 鼻熊悦子
グリーンコーポ生活共同組合おおいた グリーンコー
プ生活共同組合くまもと ワールドエコロジーネット

(一〇〇四年六月一日より八月三一日までに募金をして下さった方、ならびに「のぞみ21」民芸品、チエルノブイリ支援コーヒー・紅茶の購入を通して活動を支援下さったです。通信にお名前を紹介することを「許可いただいたのみ掲載しています。)

療法人かどもと眼科医院 加登本拠 荒木ミネ 林由
実子 小糸ファミリー 林陽子 吉田久美子 川原登
喜の 緒方ミサ子 太田千賀子 野村伸子 山崎末吉
川カ巳代治・幸子 永利恭子 泰素子 森川キミエ
松永仰一 松尾博文 毛利明子 江藤俊一 原野由美
子 木村紀子 南祐子 長棟かおる 丸山さより

募金額内訳
三千円コース
五千円コース
一万円コース
「雪だるま2号」 カンパ
「のぞみ21」 カンパ
その他カンパ
五八九、五〇〇円（一九九件）
二四五、〇〇〇円（四七件）
二七三、〇〇〇円（二三件）
一六六、三三四円（四件）
一五、〇〇〇円（五件）
五七八、〇五〇円（八三件）
（分割払いの方もいるので、数字は割り切れていません。）

●CO₂削減を理由に原発増設がいわれ不安です。●今朝大石野先生のエールノブイリの旅のドキュメントを見ました。末永く取りくんでいきましょう。●曾祖母の国の皆様の幸福を祈ります。●小額ですが役に立てて下さい。●一人でも多くの方が充分な治療を受けることが出来るように少しでも協力できればいいなと思っています。●少しでもお役に立てれば嬉しいです。●少しですが役に立てて下さい。●1回も3回も同じ事なのでまとめて送ります。これからも思いついた時にカンパします。●ヘアーカットのキャンペーンひとつでもいいとりくみだと思いました。●チケット売上の一部などです。アレクセイの村に皆さんのお持が届きますように。●私も日医大で働いていました。仲間が活躍している姿にはほめられます。●コーヒーを安くお買いいします。●いろいろ教えて下さつてありがとうございます。●娘が幼稚園の時の事故、ショックでした。わずかですが。●分割から一括振込みに変更しました。●人々の記憶から消えてしまわないように願っています。●はじめています。気持ばかりです。がんばって下さい。●私は協力金を送ることしかできませんが、少しでもお役に立てば幸いです。●少しでもお役に立てばと思う気持ちだけです。●通話読みやすくなりました。●はげまさされています。がんばって下さい！私も！●もうすぐ子供が生まれます。通信を読むと改めて命について考えさせられます。がんばつて下さい。●皆様の御健康を心よりお祈り致します。●わずかですがお役に立てたいと思います。●夏のボーナスをいたたく事ができましたので少しですがお送りします。●いつも通信を送つていただきありがとうございます。●チャリティーアカット、エールノブイリパネル展などの若い人達の取り組みに感動しました！●少しだけお役に立てるとうれしいです。●ヒロシマ、ナガサキ、そしてイラクの劣化ウラン弾の連なりの中にエールノブイリが鮮やかにフラッシュバック。息長く支援をしたいと決心しました。出逢いに感謝。●すこしだけ、つづけていきたいと思います。●原発のない世界を一口も早く取り戻したい。●これからもずっとこの活動を続けて下さい。●エールノブイリは、人類にとって尊いブレーキです。●早くから「通信」お送りいただきながら、ずっと失礼しつづけました。●せめてもの少ないですが募金募金です。●コーヒーをさっそく送つていただいとどうもありがとうございました。●小さな喜びが大きな喜びにつながりますよううに願いを込めて。●自治会役員をしています。「アレクセイと泉」を集会所で上映できたらなあ。●「エールノブイリ」は過去のものではないですね。●ほんのわずかですが感謝のシルシです。●世界の為の貴いお仕事ご苦労さま。●500円玉貯金がら募金します。ご苦労さま。●広河隆一写真展事務局を担っている者です。コーヒーで少し手伝いさせていただいとります。

卷之三

合計
八六六、八八四四